

軍隊の想い出(二)

長野県 上原 勝 義

(旧姓 柳沢)

九月の半ばになって満州より、内山少尉以下三十人の二等兵が、飛行場の警備隊として到着する。伍長と兵長が一人ずついて派遣隊と名付けられ、我が部隊の兵力が多くなり、部隊は賑やかになる。一人の兵に聞いたところでは、「この兵たちは二月の入隊で、一カ月余かかって到着して、基本教育は満州で終了した朝鮮の義勇兵が二人おります」と言う。話には聞いていたが兵員不足は最早そこまでいったのかと、一瞬暗い気持ちになる。彼等は毎日陣地構築の作業に従事していた。

南太平洋の諸島の日本軍も連合軍の圧倒的な戦力に破れ、戦況は祖国日本に不利になりつつあった。私のいる仏領印度支那(仏印)はフランス軍と日本軍の共同防衛の協定が成立しているのに、

じで、どうにもならない。見ていた小隊長殿がお前達三人が撃つてこれでは、この後誰が撃つても同じだと試射は中止となる。

それで機関砲を担いで椰子の葉と竹で造った宿舎に帰り、分解して砲身はもちろん、機関砲の隅から隅まで手落ちのないように手入れをする。これは我々若年兵の任務だ。小隊長がこのことを師団司令部に連絡する。早速、二日目に係りの将校と専門の兵が来る。機関砲をみて将校は小隊長に「綺麗に手入れがしてありますね」と言う。手入れをした我々はほっとした。専門の兵長が分解するのを見る。なかなか手際がよく見ているも気持ちが良い。さすが専門家だ、どこも異常無いですと言いながら結合する。

一休みして陣地に行き砲を据付け、この兵長が試射をする。故障がなければ良いがと思いいながら見る、五く六発で故障はこれまでと同じだ。念のためと兵技少尉殿が撃つたが、同じだった。少尉が「砲は一旦師団に持ち帰ります」と言つてその

仏軍は在支米軍に秘密裡に情報を送っているとの話を聞き、憲兵と情報班が必死に内偵している。中国を航空基地とする米軍の爆撃機の来襲が多くなり、これまでの一日置きの勤務が毎日の勤務になる。

師団司令部より撃墜した米軍機の機関砲を改造したのが届いた。大喜びで張りきり、皆で機関砲の強固な陣地を作り早速備え付ける。三六〇度、どの方向でも回転して撃てるように練習する。一二ミリの大きい弾丸である。澤合分隊長が試射をしてみると言うので一番先に撃つ。「ドドド、ドット」と辺りを威圧するような景気の良い音がした。途端に五く六発で故障だ。空葉挟が砲の薬室で焼き付き取れない。苦勞して取り除く。軽機関銃では何十発撃つてもこんな故障はないのにと思う。

今度は中隊の軽機関銃の名手、澤合分隊長が撃つ。私と同様五、六発で、同じ故障である。

第六中隊の土井上等兵(五年兵)が皆で意見をだし薬室に鉱油を塗布して撃つてみたが前回と同まま砲を古い毛布に包んで司令部に帰られた、戦力が増えたと喜んだのも束の間、ぬか喜びに終わる。

九月の末に、小隊長が中隊に所用で戻り、十月の初めに帰隊して私に得難い精勤章を持ってきて下さる。小隊長の許に挨拶に行く「陸軍一等兵、柳沢勝義は昭和十九年十月一日精勤章を付与されました。ここに謹んで申告いたします」と。おめでとう。今度はお前を必ず上等兵に進級させる心算で行ったが、二年兵に上等兵の枠が無く残念だった。中山と青柳の二人が兵長に進級した。わずか一本の精勤章は持ってきた」と話してくれたさる。澤合班長殿以下隊員の皆さんが喜んでくれる。

十月半ばに師団長閣下が飛行場に視察に来られることになり、各小隊は準備に転手古舞いだ。また閣下がお見えになるとは風雲いよいよ急を告げる情勢かと緊張する。普段は入り口に歩哨もない。砲兵、派遣隊、歩兵隊、輜重隊の四者で協議の結果、歩兵の私が歩哨を命ぜられる。身振るい

がした。閣下はともかく、幕僚がうるさい。参謀長、各参謀、高級副官といまだ見たこともない偉い人ばかりだ。ひとつ間違えば私はともかく、南隊全部に取り返しのないことになる。大きな鏡に姿勢を写し、幾度も捧げ銃の練習をする。今度は鏡を見ずにやる、目を閉じてやってみる。戦友に縦、横から見てもらう。「綺麗な捧げ銃だ、余り気をつかはずいつもの度胸で行け」と励ましてくれる。師団長閣下の到着は九時。支度を整えて八時三十分より立哨する。

ここまでくれば、まな板の鯉だ。戦友の言葉通り度胸だ、やるべきことは皆やった。九時に通告通り正確に先導車が徐行して通過、後方を指で知らせてくれる。一分ぐらい過ぎて黄色の旗を立てた閣下の車が徐行して来る。基本通り八歩前で節度をつけて「ぼしっ」と音を立て「捧げ銃」をする。私の前にびたりと止まる。大きな声で異常のないことを報告する。

閣下は答礼しながら「ご苦労」と言い、車は発進した。三台目の車は赤い旗を立て、徐行して入って来た。高級参謀だ。同じように捧げ銃をする。参謀たちは答礼をして営内に入って行く。表門の歩哨の姿勢と動作態度を見ればその隊の行動が分かることだが、私の歩哨では当てにもならない。師団長閣下がお帰りなるまで基本どうりの立哨をする。

流れ出る汗も拭かずに三時間、緊張しているのが時間の過ぎるのがわからない。視察が終わり先導車が出てきた。また「捧げ銃」で見送る。

連隊の表門の歩哨は三交代で、一時間勤務では、これほどの緊張はなかった。澤合班長殿が「柳沢、長い間ご苦労だった。もう良いから休め」と呼びに来る。小隊の隊員は対空監視に出て留守、田中衛生兵が飲み加減のお茶を入れてくれた。昼の休憩時に小隊長に、呼ばれ隊長室に行く。「柳沢、今日は大変ご苦労だった。閣下の副官殿が隊長殿に、この歩哨は誠に元気がよく、動作もはきはきし節度があり、言語も明瞭、服務態度も良く、

避し、我々は陣地で敵機を待つ。爆音もまだ聞かない。双眼鏡で良く見ても判然としない。友軍の飛行機なら今頃は来ないと判断し、警鐘を乱打しながら待機の小隊長と分隊長に「西北の上空、敵機我に向かって飛来」と急報する。

小隊長も望楼に駆け登り私の指差す方向を双眼鏡で見る。下にいる分隊長に位置に着けと命令する。微かに爆音が聞こえるがいつもの音と違う。双眼鏡にはつきりとB 25とわかる。敵三機は目前に迫ってきた。

ようやく退避が完了、ほっとする間もなく望楼を駆け降り、軽機関銃の陣地に飛び込む。私も三十発の実弾を素早く軽機関銃に装填して待機する。三機の敵機は横一線に並び、高度三、四十メートルで飛行場の滑走路を、一二ミリの機関砲で地上を掃射しながら来襲する。私も敵機の斜め横から三発と五発の転射、三十発は瞬く間に射ち終わりに二回目を装填する。私は頭上を通り越す敵機を後から撃つ。敵機の曳光弾が赤い火を噴き飛来す

実に気持ち良かった」と話しておられたと満足そうに伝えて下さる。これで心配がいつぱんにすっ飛んだ。

午後はゆっくり休めと言われたが「歩哨は午前中の勤務で、午後は監視をさせて戴きます」と言う。班長殿もそうかと快諾してくれた。

四〜五日したら、隣の派遣隊の二等兵が、九月一日付で一等兵に進級し、急に兵隊らしくなる。

派遣隊もときどき銃剣術の稽古をしているが、同年兵ばかりで団栗の背比べだ。班付きの兵長が一人で気合をかけているがたいしたことはない。四カ月下の補充兵とは格段の差だ。中に一人だけ目に付くのがいる。折をみて呼んでみる。栃木県出身で初山唯明、剣道初段とのこと。対空監視が終了して剣術の稽古をする。

十一月初旬、望楼で敵機の監視をする。空襲警報が発令するとタンホアの街のサイレンが一斉に鳴り、状況を見て望楼に吊るしてある警鐘を乱打する。作業をしている現地人は山砲兵の指揮で退

るのがわかる。大地を圧するような音に、我々の

撃っている軽機関銃の音はかき消されて仕舞う。

敵機の反転を予測して五十メートル離れた陣地に軽機関銃を据え付ける。予想通り敵機は反転し攻撃してくる。曳光弾が線香花火のように見える。

敵機はスピードをあげて去って行く。愛用の軽機は故障もおこさず意のままに射撃ができた。

対空戦はビンエンの中隊にいた時二回、今日で三回目、大分迎撃戦が身に付いてくる。戦闘中は長いようであるが、過ぎて見ればアットという間だった。澤合分隊長と二人で先に撃った陣地に行ってみると、一二ミリ機関砲の弾が四発、壕の内壁に五十センチも食い込んでいた。

澤合分隊長殿が「柳沢、あのままここにおれば、体は蜂の巣の様になっていたなあ…、とっさの判断でよく移動してくれた。お前を殺さずにすんだ。それに敵機を恐れず間断なく撃ってくれた。それにしてもお前は運が良いな。敵弾もお前の体はよくよく嫌いとみえる」と冗談を言いながら昼食に

訪ねてきたという。彼には随分世話になった、銃剣術はどうとう勝てずに終わったが思い出は多い。「先は長い、お互いに頑張ろう」と車まで送る。

仏印の十一月は乾季で、雲一つない良い日和が続く。在支米軍の空襲には最適の毎日だ。四発の大型のコンソリディテットB 24爆撃機が三日にあげず我が物顔で八千メートル以上の高空を悠々と飛行して行く。友軍の飛行機はどこへ行ったのか、さつぱり姿を見せない。仏軍も飛行機は無いのか見たことも無い。制空権は在支米軍にあるような気がする。滑走路は九分どり出来、戦闘機ならなんとか離着陸出来ると思うのに。監視は万全、対空戦も余裕がある。敵機を見ながらのんびりと毎日を送る。

昭和十九年十二月一日、澤合分隊長殿が軍曹に進級される。十二月の半ばに南隊の銃剣術大会があるとのことで、対空勤務が終わった夕方より全員で稽古に励む。九人が入れ代わり立ち代わり立会い汗を流す。タンホアに来てからも他の戦友よ

宿舎に戻る。

警報も解除になり。退避した作業員も戻り、午後はまた平常の作業開始、我々も何時もの勤務に就く。今日の体験を元にして新しい予備の軽機の壕を幾つも構築して、芝を植え偽装して上空から見え難いようにする。いつの戦闘も同じで、生と死は紙一重だ。

その後、昭和二十年二月の勤務交代まで、敵機は幾度か飛来したが、飛行場を避けて襲撃しては来なかった。我々の反撃が効を奏したのか。どうかは不明だが、丹精込めて構築した新しい陣地で敵機を撃って見たかったが、その機会はなく、残念のようなホットしたような複雑な気持だった。

四〇五日過ぎ、起床してまもなく、入口前の広場が車の騒音で賑やかになった。輜重隊の作業にはまだ早過ぎる、何だろうと外へ出て見ると、同年兵の山越君だった。駆け寄ると彼は憲兵の試験に合格して、シンガポールの教育隊に行く途中、十五分間の小休止で、私に一目逢って行きたいと

り稽古は多くやっている心算だ。息も切れない。幸いマリアも再発せずに体の調子も良い。これならいけると次第に自信がってくる。

四月月下旬の補充兵二人、同年兵一人、三年兵一人、四年上の五年兵四人の八人が対戦の相手で、第一試合に三年兵とやることになる。審判官は澤合軍曹殿。

「勝負一本、始め」の合図で相手の木銃を軽く右に払うと同時に、鋭い気合と共に突き出した木銃は相手の左胸部を刺突した。審判の右手が私の方に上がり勝負あり、それまで攻勢の上胴と五秒で勝負がついた。二試合目は相手が補充兵であつさりと勝てた。

三試合目は二分隊の五年兵殿との試合だ。あまり手合わせをしたことのない、木銃を構えたまま機を見る。ここぞとばかりに突いてきたのを、軽く避けると同時にヤアツと鋭い気合と共に突き出した。木銃は狙い違わず相手の左胸部を刺突した。審判官の右手が私の方に上がる。これで勢いに乗

って同年兵、補充兵、五年兵と次々に打ち破り七勝した。

残る一人は同分隊の五年兵殿のみ、中隊の大会と違い最古参兵を皆破る訳にはいかない。古兵の面目が有る、最後の試合はもの見事に負けた。七勝一敗で古参兵殿のお情けで優勝させて貰った。午前の大会は無事に終了する。

【解説】

体験記者は昭和十八年四月、松本第五百十連隊に入隊、すぐ歩兵第六十二連隊「討四二三四部隊」の仏印派遣要員として台湾を経て、昭和十八年七月二十四日に、仏印のサイゴンに上陸する。そして昭和十八年に第十九軍の戦闘序列が発令され、同時に仏領印度支那軍が編成された。

当時の軍司令部はサイゴンに置かれ、仏印駐屯の部隊を指揮すると共に、印度支那当局と仏印防衛に関して協力する体制を整えていた。

仏印に進駐していた第二十一師団は、最終的に

第三十八軍（信兵団）として第二師団、第五十五師団、第三十七師団、独立混成第三十四旅団と戦闘序列にあり、体験記者は、第二十一師団の歩兵第六十二連隊に所属して比島に転戦、歩兵第八十二及び第八十三連隊は仏印に展開した。その後、比島に転戦していた歩兵第六十二連隊は仏印に戻り、第二十一師団全部が仏印に集結を完了したことは昭和十七年の十二月のことである。

また陸海軍統一指揮の下で仏印の防衛に当たるため、タイ、仏印の海軍部隊は、それぞれの現地陸軍軍司令官の指揮下に入った。

そして体験記者は、比島帰りの生残りの猛者である古兵、先輩から教育を受け、また内務班でも厳しい基本教育を受けたことを体験として記している。

その中において、筆者は銃剣術に秀でる特技があり、本篇でも南隊の銃剣術大会などに出場した思い出を記録している。